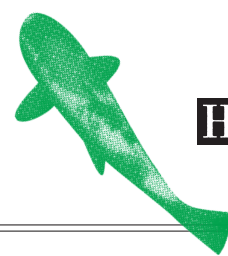


sento &
neighborhood
journalHOT LAND
MIDORIYUせんとうと
まち新聞北区の
記憶あつめ編
Vol.10

HOTランドみどり湯

ABOUT

この事業は「北区政策提案協働事業」として、一般社団法人せんとうとまちが北区と協働し、令和5年度から3カ年計画で、北区の現役銭湯全22軒(令和6年現在)をめぐる。銭湯と周辺のまちの歴史や物語を聞き取り、広く共有することで、多世代間の交流を促し、地域のコミュニティ再生へとつなげることを目指しています。

CONTENTS HOTランドみどり湯紹介/記憶地図/住民かく語りき



幼少の頃、銭湯の薪置き場で遊ぶ郁男さん。

平成の建て替えを経て地域住民の憩いの場として、東京メトロ南北線志茂駅下車、徒歩3分のところにある「HOTランドみどり湯」。この銭湯の開業は1950年頃、現店主の大家郁男さんの祖父が立ち上げたという。「祖父はもともと板橋で文具店を営んでいたが、戦争で焼失。そこで、親戚の勧めもあって、祖母が保有していた故郷(山梨県)の山林を売却し、そのお金を元手にもともとあった銭湯『みどり湯』を買収してはじめてらしい」と郁男さんは話す。

郁男さんの物心がついた頃のみどり湯は常に満員御礼、当時は三助や女中が住み込みで3人くらい働いていたという(往時は三助2人と女中8人、ベビーベッド8台)。しかし、一般住宅に風呂が設けられるようになってからは少しずつ客足が遠のいていった。「それでも父は公務員の職を辞めてまで銭湯を継いだ。自分の代で終わらせたくないかったんじゃないかな」と郁男さんは振り返る。

その後、みどり湯は1997年に建て替えを行うとともに、屋号を「HOTランドみどり湯」に改称。そのタイミングで郁男さんはサラリーマンを辞めて銭湯を継いだ。その当時は祖父の「自分さえ良ければ良い」という考えではいけない。この下、宣伝は控えめだったが、この時に設えた岩風呂やサウナは今も人気抜群だ。特に最近では「サウナブームのおかげで、男性や若いカップルのお客さんが増えてきた。インターネットの口コミやSNSで取り上げられる機会も増えていて、それらを目にするたびにうれしくなる」と運営を共にする妻のたけみさんは笑顔を見せる。建て替えて後の母屋まで銭湯部分を広げたため、浴室はゆったりと大きい。浴槽の造りがそれぞれ異なり、男女入れ替え制で味わえるのも特徴的だ。客が使える駐車場もある。

人情味あふれるHOTな銭湯

ファンたちの
熱い思いが詰まった

人気の岩風呂の近くには一息つくための椅子やベンチも多く用意されている。

銭湯を支え続ける
縁が紡いだネットワーク

しかし、郁男さんとたけみさんが夫婦で銭湯を切り盛りしはじめた当初は苦労の連続だった。「毎日、銭湯



元アルバイトがデザインしたオリジナルTシャツ。

を閉めるのは深夜で、掃除が終わるのが早朝の4〜5時。どんなに辛くても掃除だけは徹底してきたが、ストレスのせいか、アツという間に5kgも痩せてしまった」と郁男さんは話す。

そんな状況を救ってくれたのがアルバイトだった。郁男さんとたけみさんが銭湯を継いで1年くらい経った頃、たまたま居酒屋に居合わせた若者と意気投合し、そのツテでアルバイトをふたり雇えるようになったのだ。「1日にひとり来てくれるだけでも本当に助かった」と郁男さん。また、たけみさんも「掃除の後はとにかくいっぱいご飯をつくって、アルバイトの皆に振る舞っていた。おいしそうに食べてくれるのがうれしかった」と微笑む。ちなみに、元アルバイトの面々との関係性は今も良好で、地元から魚や枝豆を送ってくれる人たちがいるそう。

もともと、アルバイトは学生だけでなく、HOTランドみどり湯が好きで長年手伝ってくれている社会人やフリーターなど多士済々、その縁はHOTランドみどり湯の至るところに息づいている。聞けば、オリジナルTシャツも元アルバイトの力作で、常連客をはじめ、銭湯ファンたちに人気のアイテムとなっているそう。また、常連客がパンフレットをボランティアで自作して提供してくれたこともあるとか。いろいろな人たちの熱い思いが詰まったHOTランドみどり湯はその名の通り、人情味あふれるHOTな銭湯だ。

を閉めるのは深夜で、掃除が終わるのが早朝の4〜5時。どんなに辛くても掃除だけは徹底してきたが、ストレスのせいか、アツという間に5kgも痩せてしまった」と郁男さんは話す。

そんな状況を救ってくれたのがアルバイトだった。郁男さんとたけみさんが銭湯を継いで1年くらい経った頃、たまたま居酒屋に居合わせた若者と意気投合し、そのツテでアルバイトをふたり雇えるようになったのだ。「1日にひとり来てくれるだけでも本当に助かった」と郁男さん。また、たけみさんも「掃除の後はとにかくいっぱいご飯をつくって、アルバイトの皆に振る舞っていた。おいしそうに食べてくれるのがうれしかった」と微笑む。ちなみに、元アルバイトの面々との関係性は今も良好で、地元から魚や枝豆を送ってくれる人たちがいるそう。

もともと、アルバイトは学生だけでなく、HOTランドみどり湯が好きで長年手伝ってくれている社会人やフリーターなど多士済々、その縁はHOTランドみどり湯の至るところに息づいている。聞けば、オリジナルTシャツも元アルバイトの力作で、常連客をはじめ、銭湯ファンたちに人気のアイテムとなっているそう。また、常連客がパンフレットをボランティアで自作して提供してくれたこともあるとか。いろいろな人たちの熱い思いが詰まったHOTランドみどり湯はその名の通り、人情味あふれるHOTな銭湯だ。

せんとう情報 SENTO DATA

HOTランドみどり湯

HOTランドみどり湯 東京都北区志茂3丁目25-9 エトワール志茂 東京メトロ南北線「志茂駅」から徒歩3分
15:00~23:00 日曜:13:00~23:00 定休日:月曜 祝日は翌日休

ジェット バイブラ 電気風呂 岩風呂 露天風呂 薬湯 水風呂 サウナ

※「記憶地図」は、一部ご近所の皆さまの記憶や思い出を元に作成しています。事実と異なる表記があるかもしれませんが、ご了承ください。

記憶地図

HOTランドみどり湯編

ワークショップや近隣住民の方へのインタビューを通して見えてきたまちの記憶地図。かつての銭湯界隈のあたたかいまちの風景を想像しながら、湯上りに歩いてみましょう！

● 現在も営業中 ● 閉店

上野商店

1951年創業の酒屋。なかでも辛口で飲み飽きない「天鷹」がイチオシで、店内で味わうこともできる。



提供：上野英樹

熊野神社

荒川

弓具店

今回のワークショップに参加していただいた常連客のご実家。地元の熊野神社に弓を寄贈していたとのこと。



花火大会

川口や板橋の花火大会の際に舟に乗って花火を見ることが多かったとのこと。飛んでくる火の粉をうちわをあおいで避けることもあったという。

HOTランドみどり湯

広々とした湯舟にサウナ、ゆったりとした休憩スペースがうれしいHOTランドみどり湯。志茂銀座のまちに灯る銭湯の看板にホッと心安らぐ。かつてはその脇に川が流れていたそう。



日本空手協会 大志塾・颯志館

空手家・中達也氏が代表を務めるこちらの空手道場では、少年少女から成人まで幅広い年代の人々が稽古に励んでいる。レンタルスタジオ「颯志館」として道場の貸し出しも行っている。

豆腐屋

豆腐屋がモナカを売っていたそう。

甘味処

スマートボール屋の後にできた甘味処。あんこをのせたかき氷が売られていて、銭湯の帰りなどに食べるのがとても楽しかったという思い出が聞かれた。ジャリジャリ、フワフワなど、好みの食感にしてくれておいしかったとのこと。

薬局

薬局が天ぷらを売っていたそう。

自転車屋

自転車屋がおでんを売っていたそう。

大田屋精肉店

せんべい屋

たばこ屋

お好み焼き屋さん
一居酒屋

床屋

蕎麦屋

布団屋

玩具屋

たいやき屋

下足屋

クリーニング屋

八百屋

さいとう肉屋

駄菓子屋

志茂銀座

平成初期頃の志茂銀座の風景。青果店や鮮魚店、豆腐屋、肉屋、中華料理店、甘味処、床屋、駄菓子屋、おもちゃ屋など、何でも揃うまちだったとか。



提供：北区飛鳥山博物館

住民かく語りき

HOTランドみどり湯周辺



Photo / Mari Okamoto

6月26日、記憶集めトークイベントが実施された。これはHOTランドみどり湯周辺のかつての写真や地図を見ながら地域の記憶を掘り起こしていこうというものだ。常連をはじめとした参加者に思い思いに語り合ってもらった。

集まった面々がまず思い出したのは「志茂銀座」ともいわれた1960年代から70年代にかけてのにぎやかな街並み。「ガスコンロに火をつけて足りない物を買いに行っても間に合うほど、何でも揃うまちだった」とのこと。一時は温泉街にあるようなスマートボール屋もあったというから驚きだ。あとは不思議とひとつの店舗でふたつの業態を営んでいる店が多く、「薬屋の中で天ぷら、自転車屋の脇でおでんを提供する店なんかもあった」とか。また、入浴前後に食べる「甘味処のかき氷、精肉店のコロッケやメンチカツが絶品だった」とも。ちなみに、商店主たちは銭湯閉店間際にも入浴に来て、掃除中、オケが飛び交う中で風呂に入ったり、性別を問わず空いているほうに入ったりしていたという。

往時は銭湯も連日大盛況で、「地域の人たちは皆、ここを自分の家の風呂と思って使っていた。バスタオルを腰に巻いただけの格好で家に帰るおじさんもいた」「小さい頃から通っているから、温泉よりもここが一番いい」「三助さんに背中を流してもらっているお姉さんたちに何だか憧れていた。いつかは自分も背中を流してもらいたい」と思っていたけど、いつの頃からかなくなっちゃった。「女湯に背中一面、守本尊の刺青を施した常連客がいて、お湯に浸かるとほのかにピンク色に染まり、とてもきれいだった」といった思い出話も飛び出した。また、80年近く通い、風呂場でご近所さんと交流したり怒られたりしながら育ったという女性は「お風呂は身体で覚える。何より交流が楽しい。最近では若い人たちが増えたけど、挨拶をするときちゃんと応えてくれる人が多くてうれしくなる」と楽しそうに話していた。今もHOTランドみどり湯での心のふれあいは健在のようだ。

今回は往時のまちの様子やHOTランドみどり湯の思い出をたっぷり聞くことができた。次回も参加者とともに、多くの記憶を集めていきたい。

HOTランドみどり湯に遊びに来てね！



COMMENT

子どもたちにとっても居心地の良い「たまり場」にしたい
— 大塚都男さん（HOTランドみどり湯3代目店主）

私たち夫婦が銭湯を継いだ時は子育てで大変で、妻が本場に頑張ってくれました。それでも夫婦揃って毎日、忙しくしているものだから、子どもたちも夜中までテレビを観ちゃったりして、「私たちと仕事とどっちが大事なの」と言われてしまったこともあり、本当に寂しい思いをさせてしまいました。それがあったから、子どもたちは思春期の頃、銭湯の風呂にはほとんど入っていませんでした。でも、今ではすっかりうちの銭湯が大好きで、孫たちを連れてしょっちゅう来てくれています。

街並みが変わり、マンションが立ち並ぶようになってからは、ウチが休むと道が暗くなってしまいました。だから、夜もウチが開いていると、近所の人たちから「安心だ」と言ってもらえます。とにかく私たち夫婦が元気でいられるうちは、地域の皆さんのためにもしつかりと銭湯を続けていきたいですね。

ところで、熊野神社の本祭では町会が入浴券を配布してくれるので、地元の家族連れがたくさん来てくれます。近所に駄菓子屋やおもちゃ屋がなくなっちゃった今、子どもたちにとってもウチがある種の「たまり場」で、休憩スペースでは駄菓子やカップラーメン、それからゆで卵なんかを食べながら楽しそうに過ごしてくれています。調理が必要なものを出すのは難しいんですが、簡単なホットフードくらいは出してみたいかなと思っていて、多くのファンの皆さんに支えられているので、少しでも居心地の良い空間をつくっていききたいですね。

わたしのせんととうとまち

— 北区の記憶あつめVol.10 HOTランドみどり湯 —

発行：一般社団法人 せんととうとまち

代表理事：栗生はるか 理事：サム・ホールデン / 牧野徹 メンバー：三文字昌也 / 江口晋太郎 / 福井彩香 / 渡邊勢士

編集・執筆：熊本鷹一 グラフィック：株式会社PIN DESIGN 菅原悠介 / 岡本茉莉 協力：東京都北区浴場組合

北区政策提案協働事業「銭湯を核とした多世代間の地域コミュニティ再生と記憶アーカイブによる歴史的・文化的まちづくり」（担当：北区政策経営部シテプランディング戦略課）にて制作。

一般社団法人せんととうとまちは、銭湯とその周辺のまちを共に考え、関係性を編み直しながら、銭湯をめぐる生活文化を再生・活性化していくことを目指しています。

活動支援の協賛・寄付を募集しています
https://bio.site/sentotomachi

